



(御岳昇仙峠・甲府)

山梨・甲府城関係遺跡

所在地 山梨県甲府市丸の内一丁目

調査期間 一九九四年(平5)九月～一九九五年一月

発掘機関 甲府市遺跡調査会

調査担当者 信藤祐仁・平塚洋一・志村憲一・兒玉好美

遺跡の種類 城下町・武家屋敷

遺跡の年代 一七世紀～二〇世紀
遺跡及び木簡出土遺構の概要

甲府城関係遺跡は、市のほぼ中心に位置する甲府城(舞鶴城)の西側に隣接している。甲府城は武田氏滅亡後築城された近世城郭である。近年、豊臣系大名による築城説が提起されている。具体的には、関東に移

封された徳川家康を牽制する必要から、天正十八年(一五九〇)羽柴秀勝が築城を開始し、翌年、甲斐を受封した加藤光泰によつて本格的に工事が進められ、

特筆すべきは瓦溜である。遺物整理用コンテナにして約六四〇箱分の瓦が、B区の西端からB区西の東端にかけて東西約5m、南北約15m、高さ約1mにわたつて廃棄されていた。その中から、「丸に頭合わせ三つ雁」や「花菱」紋の家紋瓦(片)も出土した。

これ以外にも、陶磁器類が約四〇箱ほど出土している。大半は肥前系椀・皿類が占め、次いで瀬戸・美濃系椀・皿類が多い。その他出土遺物にはかわらけ・泥人形・硯・オランダ陶器・キセル・ガラス製品などがある。江戸時代初期のものは数点しかなく、一八世紀中葉～幕末にかけてのものが多いようである。木製品も井戸内

文禄二年(一五九三)～慶長五年(一六〇〇)まで甲斐を支配した浅野長政・幸長の時代に完成したといわれている。

宝永二年(一七〇五)頃に作成されたと思われる「甲府城下絵図」(大和郡山市柳沢文庫蔵)によると、今回の調査位置は、城代家老柳沢権太夫保格(三〇〇〇石)・荻沢源太左衛門(八〇〇石)などの屋敷地にあたる。

調査区を大きく三カ所に分けて発掘調査を進めた。東からA区、B区、B区西である。調査の成果は以下のとおりである。

遺構では、「甲府城下絵図」(前述)にも描かれる武家屋敷地に存在した「御先手小路」、屋敷地で使用された井戸(大きく三種類に分類できる)三六基、柳沢権太夫と荻沢源太左衛門の屋敷を区画したと推定される柵列を伴つた溝などが確認できた。

これ以外にも、陶磁器類が約四〇箱ほど出土している。大半は肥前系椀・皿類が占め、次いで瀬戸・美濃系椀・皿類が多い。その他出土遺物にはかわらけ・泥人形・硯・オランダ陶器・キセル・ガラス製品などがある。江戸時代初期のものは数点しかなく、一八世紀中葉～幕末にかけてのものが多いようである。木製品も井戸内

から多数出土し、なかには曲物・柄杓・組合せ式釣瓶と思われるものもある。

墨書のある曲物の蓋（木簡①）は、B区の一・一号井戸から出土した。井戸の規模は、およそ掘形の上部径が一・二m、深さが五・〇m、井戸側の直径が〇・七mである。曲物の蓋は泥の中から出土したもので、出土状態ははつきりしない。伴出遺物には箸、蒔絵が施された盆（？）、下駄、擂鉢などがある。

また、西側の調査区であるB区西からも、墨書資料が出土している。礎石建物甲B西SB一に伴うもので、二つの礎石のほぼ中心に埋納されていた。このことから、地鎮に使用されたと思われる。縦三二・四cm横一一・九cm高さ四・三cmの木製の箱の上面と底面・側面に墨書が施してある（木簡③）。その中に木札（木簡②）が納められていた。出土状況は、直径一二・三cm余りの土師質土器が箱の両脇に一枚ずつ伏せられていた。箱には洋釘が使用されてることから、明治一〇年以降の製作と考えられる。

8 木簡の釈文・内容

井戸一一号

(1) 「一曲

納豆

大善房

礎石建物甲B西SB一

・「除□延寿息地延年」
・「一聖

・「萬全ガ

奉祀五□神星鎮護攸

二天十羅刹女

197×61×7 011

(3)

・「除□延寿

〔病カ〕
〔延カ〕

〔箱蓋板〕

224×115×4 061

・「□□」

〔箱底板〕

223×118×4 061

・「□□」

〔箱側板〕

36×103×10 061

・「□□」

〔箱側板〕

35×103×10 061

・「□□」

〔箱側板〕

224×35×5 061

(1)は曲物の蓋である。丸い板に木（桜）の皮でできたツマミがついている。「一曲」の「曲」とは曲物の数の単位であり、「納豆」とは納豆の入っていたことを示しているのである。「大善房」は寺院の僧房を示しているものと推定できる。小学館『日本国語大辞典』で「納豆」の項には、「古くから寺院の食物として作られ」、「寺のお年玉として檀家へ贈られた」ことが記述されている。また、同様の曲物が東京の白鷗遺跡（出羽国松山藩邸跡）でも出土している

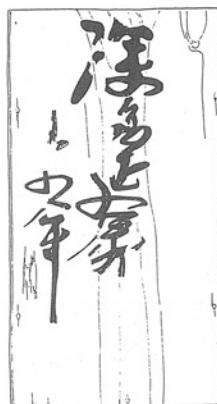
(平塚洋一)

一九九〇年)。「納豆」「徳光寺」の墨書があることより、寺院・僧房において納豆を生産していたことを裏付ける資料といえる。甲府城関係遺跡では、わずかに一点の出土であるが、白鷗遺跡では「納豆」とはつきり判読できるもの、「納豆」の墨書と推定できるものをあわせると、最低でも六点の出土が認められる。これは単に「お年玉」としてではなく、商品としての流通も窺わせる。

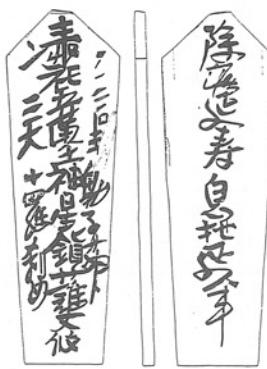
1995年出土の木簡

(2)の墨書は保存状態も良好で、一部の変色部分以外は判読できるが、(3)の墨書は、磨耗と変色のために判然としない。(2)を収納する箱の全面に墨書が施されたことも考えられる。日蓮宗では、「鬼子母神」「十羅刹女」を並立して祈禱や棟札に用いる例が多数あることより、(2)(3)は、「法華經」もしくは日蓮宗に関連したものといえよう。日蓮宗では、「二聖」「二天」とは、「勇施菩薩・薬王菩薩」「毘沙門天・持国天」をそれぞれ表す。「二聖」+「二天」+「鬼子母神・十羅刹女」(一神格として数える)で「五番善神」と呼ぶことがあるので、木簡の不明文字は、「番」を「萬」にあてた可能性も考えられる。下に続く「星」は、日蓮宗と密接に結びついた妙見信仰(北斗星を仏教に取り入れた信仰)との関連であろうか。二つの礎石のほぼ中心に埋納されていることから、地鎮を目的とした遺物と推定できる。

現在、これらの木製品は保存処理も終了し、要望があれば誰でも



木簡(3)



木簡(2)



木簡(1)

0 5 10 cm